



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1925, 3(5): 562-564

ISSUE DATE:

1925-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182857>

RIGHT:

雜報

○軍艦滿洲の海洋測量

大正十四年度に於て我が海軍水路部は「滿洲」をして日本南方海面即ち南は赤道、西は東支那海、臺灣海峡、東は南方諸島マリアナ諸島に及ぶ海洋の組織を調査し、此の方面の海流の状態を明にし、之に附隨して諸種の觀測を行はせるといふことである。其の要目は海流測定、海水の溫度及比重の測定、深海錐測及底質採取並に特別氣象觀測であつて、錐測では昨年發見された深さ九千米以上の野島嶺南方の海溝を再測して明亮にし、又室戸崎南東方の疑問の堆や琉球海溝を探索するさうである。之に依つて日本近海の海底が一層明瞭になるであらう、而して滿洲海淵と名くべき世界一の深處が確められたならば面白いことである。因に云ふ滿洲は四月中旬横須賀を發着して第一次の調査に従ひ本年度中には四回の探究を行ふといふことである。

○世界に於ける生絲

世界に於ける生糸供給量を見るに

(單位千基)

	一九二四年	一九二三年	一九二四年	一九二五年
上海輸出	五、八〇〇	四、〇〇〇	四、八五〇	三、八〇〇
廣東輸出	二、七〇〇	二、五〇〇	三、一五〇	二、七〇〇
橫濱輸出	三、二〇〇	八、八五〇	七、二五〇	三、〇〇〇
波斯、中亞	五、五	—	—	一〇五

印度及印度支那	一、五	八、五	一〇〇	六〇	一〇〇
歐洲收穫	四、三三〇	三、五〇〇	四、〇一〇	五、二五〇	四、〇〇〇
レザアント地方	一、八〇〇	五、〇	五、〇	五、五	八〇〇

計

七、三三〇 三、二五〇 三、六〇〇 三、五五〇 四、〇〇〇

蓋し生絲の産額は大體に増加し一八七五年頃には一千万基であつたのが、一九〇〇年に二千万基となり今日では凡そ三千万基に増加したのであるが、同時に其消費の増加は著しく、爲めに市價は急に騰貴した、之は主として米國に於ける消費量の躍進によるものであつて、一方横濱を生産地とする一方紐育は其一大消費地である。米國の絹織業は一八九〇年に始まり、保護關稅を施したために、急速に發達して一九〇二年には里昂と併立し、今日では其以上になつてきた、其工場は年々七億弗の生産をなし悉く紐育附近に集中されてゐるが、米國で絹物を稱して販賣されてゐるものは年額一億基に上るこの事であるから、世界の全産額を以てしても足許にもよりつけない、人造絹糸が最近大に發達したのも全く其のためであつて、一九一三年に世界の人絹が一千万基であつたのに一九二三年に四千五百万基を越え、米國は千四百万基を産して世界第一の人絹國となつたが、獨逸及英國各七百万、白、伊、佛各四百万を産出してゐるのである。これらの増産によつても、猶米國の絹物消費量を充たし能はぬのである、蓋し絹物は米國では普通品又は絹莫大小が多量につくられて、勞働階級に莫大の需用があるからである、されば今日では各國とも生絲の生産を極力獎勵してゐるが生糸産

額が其消費増加に伴はざるによつて人造絹糸の外に屑絲の使用も盛大になつてきてゐる、英國瑞西佛國等いづれも盛んに之を使用してゐる。此等の諸國は米國の擡頭する以前に於て絹織物工業の優越の地位を占めてゐたのであるが、今日でも紡績絹糸シャツ及びアールト産地として第一位にあつて、就中里昂及パールは其二大産地であり、獨逸レナーン地方も亦之を製出し英國ではヨークシャーが其中心地である。併し米國では絹工業と同様に大絹絲紡績工場を起さんとしてゐるから、生糸の消費は益々増加すると見ればならぬ。

OMENIA事情 アビシニアは古エシオピアの名にて

世人の知る所であるが、アビシニアとは、昔アラビア人の命名で、夷狄の意であるから、同國人はアビシニアと呼ぶるゝを好まない、この國の建國は古い、ユダヤ國全盛時代にアビシニア女王(シバの女王)メケダはソロモン王の文華に憧れ同王を訪門し、後結婚して一子を擧ぐ。是がアビシニア初代の王たるメネリツク一世だといふ。一時阿弗利加西北部大半を領有して印度と貿易した史跡がある。從つて今日でもアフリカに於て最も古い獨立國の唯一なるもので、約千七百年前基督教に歸依して以來其信仰の形式に何等の變化がない、行政狀態も古の封建制度を續行してゐる。此國は海岸線のない北緯五度から一五度まで、東經三十五度から四十二度までの間にある陸國であるがこれは英領東阿弗利加、伊領、佛領ソマリランドなどによつて紅海との連絡を斷たれてゐるためである、面積三十五万平方哩

(我本土の約四倍)一般に高原性の土地で首府アスマベバは海拔七千五百呎以上に位してゐるから、赤道に近いけれども氣候は日時我國の秋の如くである、旅人がもし佛領シバに上陸すると其地は一見文明人の生存すべからざるが如き感があつて岩石磊々たる荒野としか見えぬ、從つて此奥に沃土千里に亙る高原地帯があるとは信じられぬ、併し汽車で十時間も駛せてアビシニア國境に入ると地勢が變化する、蓋し佛領ソマリランドの領地内は何等見るべきものもない無毛の地であるが、ジブチより九十軒をへてダオウンと云ふ國境小停車場にくると趣が變つて、こゝよりデレダラ市までは土地一帯に火山岩から成立してゐて植物がよく生長してゐる、デレダラ市はジブチ出發後第一日の宿泊所で海拔四千呎、一九一八年迄は鐵道の終點であつたが、人口約一万の市街で希臘人の三百人といふが在住外人の尤も多い數である、佛國人が三十有餘居住してゐる、町には並木もあり水道もあり、余程進歩した町である、第二日目以後は所謂東阿弗利加地溝帯の東方斜面を登るのであるから汽車の勾配も急になる、其宿泊地ハウアシユと云ふ所が野獸狩の中心地でホテルなどもある、政が多いので、惡疫豫防の注意をせなくてはならぬ、第三日目は一舉して五千四百呎を昇らねばならぬから汽車は朝五時半に出て進む、困難な急傾斜である、首府に近くに従ひて人家次第に多く棉花小麦等の耕作が行はれてゐる、何等の肥料を施さずして數千年に亙りて作物が充分に發育する上から考へて沃土と云ふべきである、見渡す限りの廣野が耕作されずにあるのが多い、アビシニアの森林地は首府より南に入

らないと見られぬ、礦物埋藏も多いであらうがまだ調査されてゐない、人口の如きも正確に知れないが千三百万と想像されてゐる、首府の外に都會といふべきはデレダラとハラルとアクームの三つで、ハラルは同國の公國として知らるゝ古市の一で、アクームは皇帝の戴冠式を行ふ所である、十月から四月までの乾期を除いて五ヶ月間の兩期は間斷なき降雨があつて平原の土地は熱病が多いが、首府の附近は海拔八千呎の高原であるから氣候も宜しい、住民は余程複雑で、純粹のアビシニア人と云ふべきは全人口の約三分一に過ぎない、他の大多數は十六世紀中に阿弗利加中部地方より侵入したカラ族で、色も黒く文化の程度が低い、しかし互に親密で、アビシニア人と共に戦を好む風がある、近世に至り一八七五年から六年に埃及軍に勝ち、一八九六年に伊太利遠征軍を取つてからこの方、武力に就ては余程樂觀してゐる。實に此時には一万四千の伊太利軍が十二万のアビシニア兵に攻められて殆んど全滅したので本戦役の結果アビシニアは國際的に其地位を高め、首府アダスアベバには列國の公使館が設立される様になつたので今日では人口も約十一万になつてゐる。フランコ、エシオビヤン鐵道はジブチよりこゝまで延長五百哩で長さは七八六基に過ぎないが唯一の交通機關で、生産輸出品たる、獸皮、山羊、羊皮、珈琲、蜜蠟、象牙の類を佛、英等に輸送し、輸入貿易には綿製品、双物、金物類、建築材料等がある。この鐵道の外に陸路カラバンによつてナイル上流の舟運に聯絡するものがあるが、到底この鐵道の敵でない。日本製の綿布類殊に生シーチングが全輸入の八割以上にも

達し、將來漸増の見込がある、しかし之を行ふものは英佛伊の人々で、日本人の直接に貿易を營んでゐるものはない、輸出品の獸皮蜜蠟の如き本邦にも相當需要があるのであるから、邦商のこの方面に活動することは望ましいことである。

新著紹介

○郷土會記録 柳田 國男編

東京市外馬込村大岡山書店發行 定價貳圓
五拾錢 四六版頁數二六四 地圖十四葉

柳田氏を中心として趣味ある郷土地理研究の會合を催して居た郷土會の記録である。大正元年から同五年頃までの會合での話を柳田氏が筆録されたもので、二三の講話者の原文をも雜へて居る。話した人々には新渡戸博士を初め風俗や生業に心を用ひて居る人達が多いので生々した面白味を添へた地理學の一面を示して呉れてゐる。紹介者の殊に面白いと思つたものは新渡戸博士の「三本本村興立の話」で父祖の開墾事業の苦心を談られて居ることや、二宮徳氏の「丹波の雲原」や石黒忠策氏の「湯坪村と火燒輪和」で山中の國境が變つてゆく有様や山國の生活が海邊の生活と違つた狭さを持つて居ることを知つたり、石黒氏と田中樸吉氏の「鹿島の崎」で砂丘上の集落の狀態が判り、東京附近の研究としては那須峻氏の「代々木村の今昔」、有馬頼寧氏の「沙入村の變遷」及「隅田川の船」、山中笑翁の「四谷舊事